
機動戦士ガンダム00

赤碕隼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム00

【コード】

N9338G

【作者名】

赤碕隴

【あらすじ】

刹那達ガンダムマイスターが世界を変革させてからの未来・・・世界はまだ平和になっていなかった。世界を平和にするために刹那達は新たな仲間と共に戦っていく！

第一章 プロローグ（前書き）

機動戦士ガンダム00の未来を想像（というか妄想）しながら作り
ました。楽しんでもらえればうれしいです。

第一章 プロローグ

刹那達が世界を変革させてから5年後、世界は脅威に晒されていた。武装組織ネクスと名乗る団体による世界各国へのテロ行為、要人の演説中の暗殺など被害は凄まじい勢いで増えていった。それにより世界は再び紛争が起ころうとしていた。それは、ソレスタルビーイングの新たな戦いの始まりとなった。

第二章 始まりの日

人革連領 中国

そこにネクサスのテロによって廃墟となった街があった。その街の一軒の家であったであろう残骸の前で、一人の少年が立ち尽くしていた。その少年は見た目から考えて15歳くらいだろうか。黒と茶色の混ざった髪に紺色の瞳、服装は病院で着るような患者用の服装をしていた。

「なんで・・・こんなことに・・・」

少年はそうつぶやくとゆっくりと残骸に近づいていく。その瞬間、「動くな！」

辺りに響き渡る声。一人の男が少し離れた物陰から飛び出してきて少年に拳銃を向けていた。

「武器を捨てて、両手を上げる」少年は懐に手をいれ、ナイフを出すと両手を上げてナイフを下に落とした。男はナイフが手から離れたのを見て気がゆるんだ。その瞬間、少年はナイフが地面に落ちる前に靴の踵でナイフを蹴り上げ、回し蹴りの要領で男に向かってナイフを蹴り飛ばした。

「なっ！」

その一声だけ上げたときにはもうナイフは、男の額に刺さっていた。少年はその男が倒れてから十分に血が流れ出たのを確認してから男の額に刺さっていたナイフを抜き取った。

「お前がライナー・イミテーションか？」

いきなり話し掛けられて振り向くと、そこには一人の男が立っていた。少年、ライナーは距離を取るとその男を観察した。

「俺は刹那・F・セイエイ。ソレスタルビーイングのガンダムマイスターだ」

ライナーはその組織名を聞いて、内心驚いていた。ソレスタルビーイングといえば、数年前に現れた私設武装組織の名前だ。しかも、

5年前には腐敗していたアロウズを攻撃していたとされている。

「そのマイスターが僕に何の用ですか？」

ライナーは身構えながらそういうと、刹那は

「ライナー・イミテーション、お前をスカウトにしにきた。」

そう答えた。それに驚いていると、刹那は続けてこういった。

「お前はこの街で起きたテロで家族も親戚も亡くしている。それだけでなくおまえ自身も人革連に連れていかれ、超人機関で人体実験により体を改造された。違うか？」

そこまで聞いたあとにライナーは

「君達はどこまで知っている？」

殺気を放ちながら脅すが、刹那が全く動じないところを見て殺気を放つのを止めた。

「まあいいよ、それで？」

ライナーがため息をつきながら、先を促した。

「お前には、ガンダムマイスターとして戦ってもらいたい。強制はしないが、もしお前がこの理不尽な世界を変えたいと思うならお前は……」

刹那が続きを言いかけたとき、

「いいよ」

ライナーは即答でその返事をした。

「どうせ僕には行くところがない。だったら今やれる事をやるべきだからね」

刹那はそこまで聞き届けると頷き、こういった。

「俺はこれから宇宙の母艦に戻る。お前は どうする？」

「僕も行けるのか？」

ライナーにとっては当然の疑問だった。ライナーは身分を証明できる物を持っていない。それがないと、まず軌道エレベーターを使うのは不可能だろう。

「問題はない。ガンダムで宇宙に上がるからな。コクピットには立つてなら乗れるくらいのスペースはある」

ガンダムのコクピットは想像よりも広いらしい。だがそれよりも気になったのは、他のことだった。

「ガンダムは単機で大気圏外への離脱が出来るんですか?」ガンダムの母艦が大気圏外離脱を行えるのは事前に超兵機関で教えられていた。しかしまさか単機でも可能とは予想外だった。

「じゃあ乗せてください。ガンダムの操作を見てみたいですし」

刹那はそれを聞くとガンダムの隠してある場所まで案内すると言い、もといいた数キロ離れた場所までライナーをつれていった。

「何も無いじゃないですか。ここであつてるんですか?」

ライナーががっかりしながら言う。ライナーの言うとおり、案内された場所には何もなかった。

「ここにあるさ、今も目の前にな」

「えっ」

ライナーがそうつた瞬間に

「GNシステム、リポーズ解除」

と刹那はつぶやく。すると、目の前にガンダムが現れた。目の前のガンダムは青と白を主体にしたカラーリングで、右腕には大きな剣がついていた。現れたガンダムのコクピットから搭乗用ワイヤーが降りてくると刹那はそれを掴んで上がっていった。「僕はどうすればいいの?」

ライナーが大きな声で言うと、ガンダムが膝立ちになって手を降ろした。

「手に乗れ、ライナー」

ガンダムの手に乗ればいいらしい。ライナーは素直に従い、手に乗る。するとガンダムはコクピットのところまで手を移動させた。コクピットに入ると中は思ったよりも広かった。

「座席の後ろにいつてくれ」

刹那に言われたとおり後ろに回ったときにコクピット内にアラートが鳴った。

「どうしたの?なんなの、このアラート?」

びつくりしたように刹那に聞くと刹那は険しい表情をしていた。

「くっ、ネクサスか！」

刹那がここまで険しい表情をしたのは、相手が厄介だからだからだろうか？そうおもったときコクピットが閉じた。「口を閉じて、しっかり掴まっている！」

ライナーは返事をする代わりに言われたとおりに口を閉じ、シートに掴まると先程まで聞こえていた音が変わった。おそらく機体が浮いたようだ。そう考えた瞬間、ライナーの体を大きなGが襲った。「ぐっ」

ライナーはそのGに耐えるために歯を食い縛った。刹那はガンダムを加速させると通信回線を開き、

「こちら刹那・F・セイエイ、トレミー応答を頼む」

「こちらトレミー、どうしたの刹那？」

「スカウトは完了した。だが機体を発進させるときにネクサスに見つかった」

「どうすればいい？」

「これより大気圏外離脱を開始する。トレミーは今どこにいる？」

「トレミーは現在衛星軌道上天にて待機中です」

「そうか、なら大気圏外離脱後、帰投する」

「了解しました、また後でね、刹那」

そういつて通信は切れたようだ。刹那はいくつかの画面を操作している。操作を終えると刹那は

「トランザム！」

そう叫んだ。画面をみるとTRAMS-AMと表示されていた。なんだろうと思いつつ、ただ襲ってくるGに耐えていた。ガンダムはものの数分で大気圏外離脱を果たした。

「もう大丈夫だ」

刹那がそういうと気になっていた事を聞いた。

「さっきのトランザムって何？」

「トランザムは一定時間、出力の3倍に相当する性能を引き出す機

能だ」

「3倍！？だからこんなに早く大気圏を離脱出来たのか」
そこまで聞くと

「見えたぞ、トレミーだ」

正面を見ると少し離れたところに船がいた。どうやらあれがトレミーという船らしい。あそこに自分のガンダムがあると思うと自分の鼓動が高鳴るのを感じた。

「あそこに僕の居場所があればいいな・・・」
そう心の中で呟いた。

第三章 アクセルガンダム

「エクシアR2、着艦しました。お帰り、刹那」

オペレーターの声が聞こえると刹那はコクピットを開けて出ていった。それに従うようにライナーもコクピットから出ると、そこは艦の中にしては明るかった。

「お前さんがライナーか、わしはイアンだ。トレミーの整備をしておる」

声の聞こえたほうを向くと、そこには中年くらいのおじさんがいた。イアンと名乗ったその男性のまわりにはボールのような浮いていた。「まわりにいるのは何ですか？」

「ああ、こいつらか。こいつらはハ口とってサポートメカだ」
ライナーがまわりを見回しているとイアンは

「早速だがおまえさんの機体の所まで案内してやろう。ついてこい」
そういつて先に進んでいった。ライナーがついていくと、イアンは部屋に入ってしまった。その部屋に入ると、部屋の中は薄暗くてイアンがいるところのモニターの光がついているくらいだった。

「よし、来たな。これがおまえさんの機体だ」

そういつとモニターの向こうの部屋の照明がつき、ライナーは眩しさに目を閉じた。そして再び目を開けるとモニターの向こうのガラスごしにガンダムが立っていた。機体色は赤と白。両腕は武装を持っていかなかったが腰に二本の剣を装備し、脚には大き過ぎない程度の追加武装がついていた。しかし何よりも目を引いたのは、背部についている大きなスラスターだった。

「GNA-001F アクセルガンダム、バックパックを換装させることであらゆる状況に対応出来るようにした機体だ。いまは高機動用のバックをつけてあるがな」

「これが僕のガンダム・・・コクピットに乗ってみたいんですがいいですか？」

「ああ、かまわんぞ」

イアンはモニターの一部を操作すると、ドアの横にあった扉が開いた。ライナーはそこからアクセルガンダムに近づいていった。コクピットは空いたままだったので中にはいりシートに座ると、なんとも言えないような高揚感が押し寄せてきた。(なんだろうこの感じ、懐かしい・いや違う、少なくとも僕はこの感じを知っている) そう感じたライナーはイアンに言った。

「実際操作をしたいんですが」

そこまでいったときにトレミー内にアラートが響いた。

「10時方向より敵機接近、距離42000」

「敵!？」

「マイスターは至急ミーティングルームへ集合してください」

ライナーがガンダムから出てきてさっきイアンがいた部屋に入ると、刹那が部屋に入ってきた。

「ここにいたか、ライナー。ミーティングルームに行くぞ」

「わかった、どこに行けばいいかわからなくて困ってたんだ」

刹那のあとをついていくと、ミーティングルームに着いた。部屋に入るとすでに部屋には4人いた。部屋は適度に広く、部屋の中心の床には円形のモニターらしいものがあつた。

「来たわね、あなたがライナー?」

部屋にいた1人の女性が聞いてきたので返事をした。

「はい、よろしく願います」

「私はスメラギ・李・ノリエガ。ソレスタルビーイングの戦術予報士よ」

女性、スメラギが自己紹介を終えると、壁に寄り掛かっていた緑色のパイロットスーツをきた男性が次に自己紹介を始めた。

「俺はロックオン・ストラトス。ケルディムガンダムのマイスターだ。よろしくな、新入り」

軽い人だなあと思いつつ、

「はい、こちらこそよろしく」

近づいて握手すると、もう1人のオレンジ色のパイロットスーツを着た男性が話しかけてきた。

「僕はアレルヤ・ハプティズム。それから彼女はマリー」

男性、アレルヤは傍に立っていた白い髪の女性を紹介した。

「よろしくお願ひします」

優しく笑みを見せるその女性の挨拶を聞いたあとに

「いえ、こちらこそ」

みんなと挨拶を終えたところで、スメラギが話し掛けてきた。

「その辺で挨拶は終わりにしてミッションプランを教えるわ」

これから初めての戦闘をすることになると思うと胸が高鳴った。

「ミッションは接近している敵機の迎撃、まずは・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9338g/>

機動戦士ガンダム00

2010年10月10日01時29分発行